



福井大学教育学部
附属義務教育学校

No.05

令和8年3月5日

学校だより

卒業証書授与式 校長式辞より（抜粋）

（略） 102名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして保護者の皆様にはご多用の中、ご参列を賜りお礼を申し上げますと共に、お祝い申し上げます。

伝統的に探究的な学びを追究する本校ですが、新たなメンバーが加わった後期課程のスタートと共に、本格的な探究の「旅」が始まりました。旅のスタートは学年目標決め。紆余曲折の長い議論を経て、令和5年6月13日6限目に決定した学年目標は「百六花繚乱」。「1人1人の個性を生かし、笑顔あふれる学年にしたい」という願いが込められました。何と晴れやかで前向きにさせてくれるワードでしょう。

社会創生プロジェクトは「観光とのつながりを調べよう」。略して「観つな」。「福井の観光を盛り上げる」目的ではなく、「観光って何だろう」ということに向き合うプロジェクトでした。「アート」

「食」「動物」などの小グループに分かれて、校外学習や「観つなフェス」などで観光とのつながりを追究しました。スッキリした解答が得られたわけではなかったと思いますが、社会のどんな分野にも、「観光」の視点、すなわち、ニーズや相手のことを考えること、広い視野を持つこと等が含まれていることを実感しました。「観つな」は、「社会で生きる」ことそのものを考える「旅」だったと言えるでしょう。

君たちの「旅」のクライマックスは、9年生文化祭での学級演劇。A組は「爆弾」。特に変化のないシンプルな舞台での緊迫の60分。全員で創り出した不気味な雰囲気、迫力の爆発シーン、繰り広げられる心理戦。人間の内面について考えさせられました。振り返りには「単なる勝ち負けでなく、お互いの意見を理解し合いながら議論を深められたことで、9Aは、お互いを理解し合えるクラスなのだ気づいた」とありました。演劇は単に上演することだけが目的ではなかったのです。

B組は「十字屋敷のピエロ」。多くの伏線が張り巡らされたエンターテインメント。象徴的な幕開け、ピエロの存在感、主人公や人形師たちの印象的な衣装や小道具。「運命」は人と人の中にもたらされるのだというテーマを感じました。振り返りには「セリフの解釈について議論を重ね、他者の視点に立って物事を考える力が高まった」とありました。登山は頂上に立つことが目的でなく、山道を歩くことそのものが目的だったのです。

C組は「島はぼくらと」。自分の生きる道を探すかけがえのない日々を表現した青春群像劇。メインキャストの素晴らしいキャラ立ちと微妙な人間関係の表現、誰一人欠かすことができない重要な脇役、存在感抜群の「フェリー」。将来に対する不安と希望を人間ドラマで見事に表現しました。振り返りには「全員で自然と活動したくなる、個々の力を引き出し支え合えるような雰囲気づくりをした」とありました。誰一人取り残さないということは、附属が伝統的に大切にしてきたことです。

60分の学級演劇で、おそらく誰もが感じたこと、それは「9年生の文化祭でしかなしえない」ということだったのではないのでしょうか。練習を繰り返せば下級生でも上演そのものは可能でしょう。しかし、テーマ決めから筋立てと表現、最大限の効果もたらし方等を徹底的に考え、数え切れない試行錯誤の末の一度きりの本番。学級全員の個性豊かな才能は様々な役割を担い、どの一人が抜けてもそのピースは埋まらなかったはずです。人は違っていいのです。学年のうた「百六花繚乱」の一節「幸せと悲しみ たくさんのがあった日々 仲間がいたから乗り越えられた さあ今こそ1つになるとき」とは、演劇の幕が上がるその瞬間のことも聞こえてきます。

体育祭の応援合戦も秀逸でした。「『応援』とは何か」を追究する求道者のような姿勢を感じました。きらびやかな華やかなものに走らず、力強く、かつ細部まで統率が取れ、みなぎらせた無限のパワー。その裏に存在した、団長をはじめとする君たちの「苦悩の旅」は容易に想像できましたが、それを乗り越えた者だけに許された晴れやかな表情が印象的でした。

このような経験は、社創や学校行事の専売特許ではありません。「学問とは問うことの学習」です。普段の毎日の授業で、自分たちで問いを立て、協働で大なる試行錯誤の末に解にたどり着き、省察して次の問いを立てる経験。社創も教科の授業も演劇も、全てつながっていると自信を持って言えるのではないのでしょうか。例えば、家庭科で、福井市のラーメン店とのコラボによる学級代表作品の調理と販売、論説文を批判的に捉えて、自ら問いを創り出した国語科の授業、チームで技能向上を図る体育科の授業、自己を徹底的に見つめる、附属の文化とも言える美術科「15歳の私」など、「じっくり、ゆっくり、とことん」情熱を傾けてきた授業ばかりに違いありません。そのどれもが君たちと先生方とで一緒に創り上げた、賞味期限は一瞬の、二度と同じことは起こらない「演劇」本番のようなもの、「奇跡」の連続だったのです。全ては「問うこと」から始まりました。「問いを持った部族は生き残ったが、答えを持った部族は滅びた」のですから。

そして「旅」は、いつも思い通りに行くとは限らないということも十分経験してきたことでしょう。他者との微妙な関係、自己の限界との対峙、説明のつかない苛立ちやあせり…。しかし、壁にぶつかった時こそ、自分をつくり直すチャンスなのかもしれません。「成功か失敗か」は、旅の終わりに考えればいいことなのですから。今年度の大学入学共通テストの国語の問題に、遠藤周作の次のような内容の文章がありました。「アスファルトの道は安全だから誰だって歩く。でも振り返ってみれば、その道には自分の足跡なんか一つだって残っていない。海の砂浜は歩きにくいけれども、振り返れば、自分の足跡が1つ1つ残っている。決してアスファルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないでください」という主人公の母からの手紙です。道を拓き、「素敵な人生」にするのは、皆さん自身なのです。（略）

校内のあちこちにあるホワイトボードに書くマジックの感触、雪が降ると渡りたなくなる技術棟、プロジェクトルーム隣の台形机と絨毯、生徒玄関にいるスッポン、暗転した文化祭オープニング、感動のグロリア、バランスの取れた遊び心、いつも応援してくれた家族、かけがえのない仲間、笑い声、不安、達成感、口惜しさ、喜び、そして希望。そのすべてが附属、そのすべてが自主協同です。さあ、附属での生活にもピリオドを打つ時が来ました。「106の笑顔の花が咲いて輝いて咲き誇る 広がる世界へ踏み出す勇氣 今日より明日 僕らは輝く未来へと進んでいく」という君たちの学年のうた「百六花繚乱」のように、胸を張って堂々と、悠々と、生きていってくれることを心より祈り、式辞といたします。

